

# パキスタンと核不拡散問題 ー カーン・ネットワークを中心に

2007年3月17日  
日本安全保障貿易学会  
広瀬崇子(専修大学)

# 本報告の構成

---

1. パキスタン核開発の背景
2. 不拡散問題へのパキスタンの基本的態度
3. A. Q. カーンの経歴と行動
4. パキスタンの核拡散と今後の課題

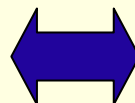
# 1. パキスタン 核開発の背景

## 印パ分離独立

■ パキスタン =  
ムスリム国家

「2民族論」

ヒンドゥーとムスリムは別の「民族」



■ インド =  
政教分離国家

異なる宗教でも共存できる

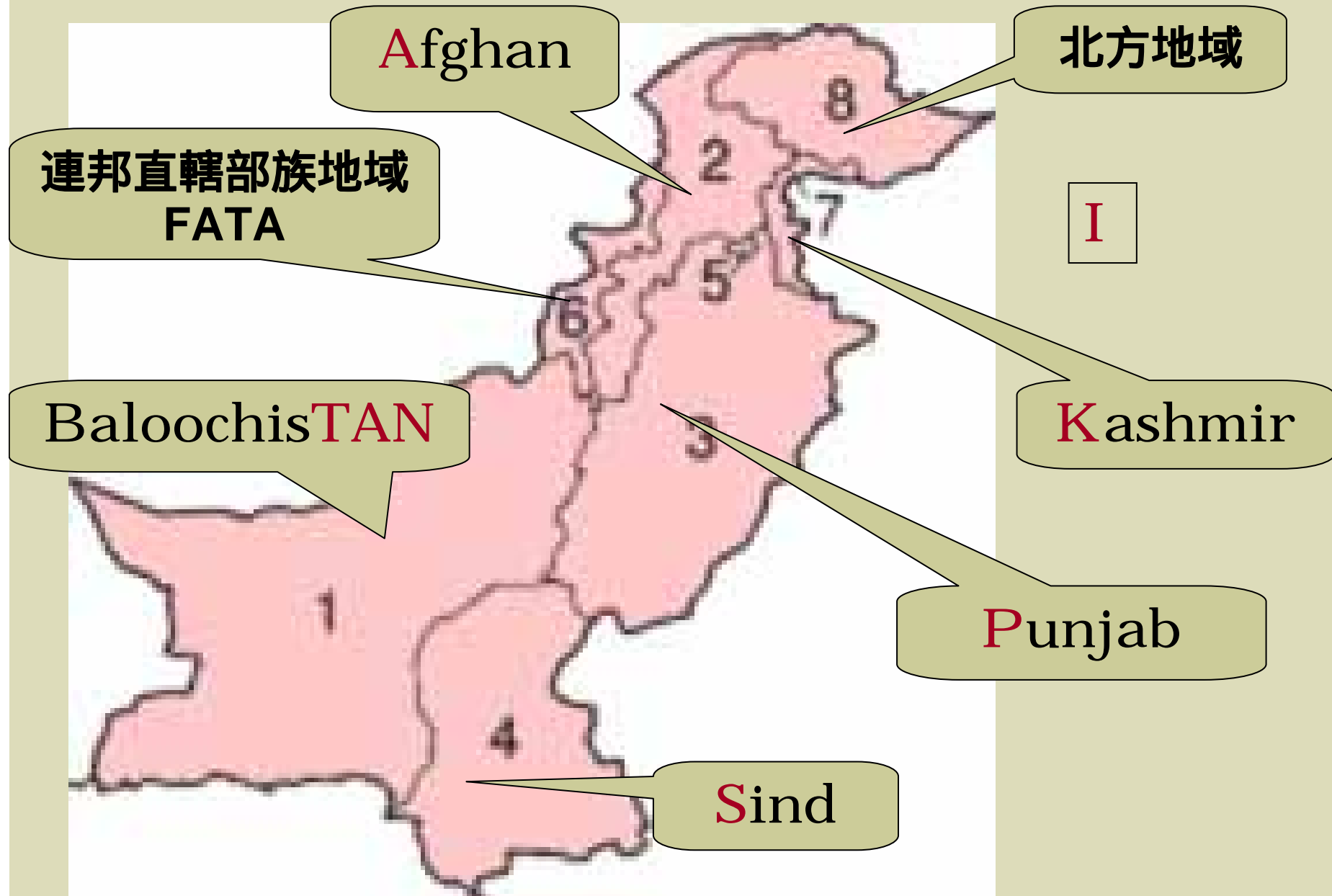
建国の理念の対立

宿命の対決へ

# 2人の指導者 2つの国家



# 国名の由来 = “PAKISTAN”



# インドの核開発とパキスタン

---

- 1974年：第1回核実験
- ブットー大統領「草を食べてでも核開発を」
- 1970年代後半より急ピッチの開発
- 1980年代後半：核兵器取得(?)
- 1998年5月11日、13日：インド核実験
- 5月29日：パキスタン核実験

# アメリカの対パキスタン政策

## - アメリカに翻弄されるパキスタン

---

- 冷戦時のパートナー
  - しかし、印パ戦争では支援なし
- ソ連のアフガン侵攻時の前線国家
  - 大量の軍事援助、パキスタンの核開発黙認
- ソ連撤退後、パキスタン離れ
  - 核疑惑を理由に武器供給停止
  - パキスタンの孤立化とタリバン支援
- パキスタン「テロ支援国家」をぎりぎり免れる

# パキスタンの外交政策

---

- インドへの対抗 = 国家の生存
- 第三次印パ戦争後の国力の低下：  
通常兵器ではインドの約2分の1
- アメリカへの従属と中国への依存
- 国内のイスラーム化政策



# 印パ戦争

1947  
第一次

1965  
第二次

1971 第三次  
(バングラデシュ  
独立戦争)

# パキスタンの2つの武器

1. 代理戦争  
= カシミール紛争  
への支援  
「越境テロ」

2. 核兵器  
インドとの軍事的  
不均衡を補う



印パ対立のエスカレーション

# 核不拡散問題への基本姿勢

---

## すべてはインド次第

- NPT, CTBTはインドが加盟すれば、即座に加盟を明言
- 1998年5月、インドに続いて核実験  
核兵器保有宣言
- 核兵器保有によってインドと「対等」な地位に立ったとの認識
- 「イスラームの核兵器」をアピール
- 先制不使用(インド提案)には応じず

# A. Q. カーン の 経 歴

- 1936年:ボパール(現インド中部)に生まれる
- 1947年:分離独立で兄たちがパキスタンへ
- 1952年:高校卒業を機会にパキスタンへ(ムハージル)
- カラチ大学卒業
- 1961年:ヨーロッパにわたる
- ドイツ、オランダ、ベルギーの大学で  
冶金専攻、博士号取得
- 1972年:URENCOの下請け研究企業  
(FDO)に就職、遠心分離関連技術入手
- 1975年:パキスタンに帰国  
ムスリムとしての意識大  
人当たりがよく、社交的な人物



Wikipedia より

# パキスタンでの核開発

- 1975年: パキスタン原子力委員会委員
- 1976年: 「工学研究所」(後に「カーン研究所と改名)設立、ウラン濃縮に取り組む
- 1977年: ~ 核開発が進行、パキスタン西部に核実験場の建設を開始
- 1983年: 核技術を盗んだ罪でオランダの裁判所から禁固4年の有罪判決(裁判手続き上の不備により無罪となる)
- 1998年: 核実験に成功
- 2001年: ムシャラフ大統領により、研究所長の職を解任される

# 核技術の漏洩

- 2004年2月4日、パキスタン国営テレビで、各技術の漏洩を告白
  - 1989 - 91年：イランに
  - 1991 - 97年：北朝鮮とリビアに
  - ~ 2000年：北朝鮮  
にはさらなる  
技術提供
  - 2004年 ~ 自宅軟禁

Wikipedia より



# カーン・ネットワーク

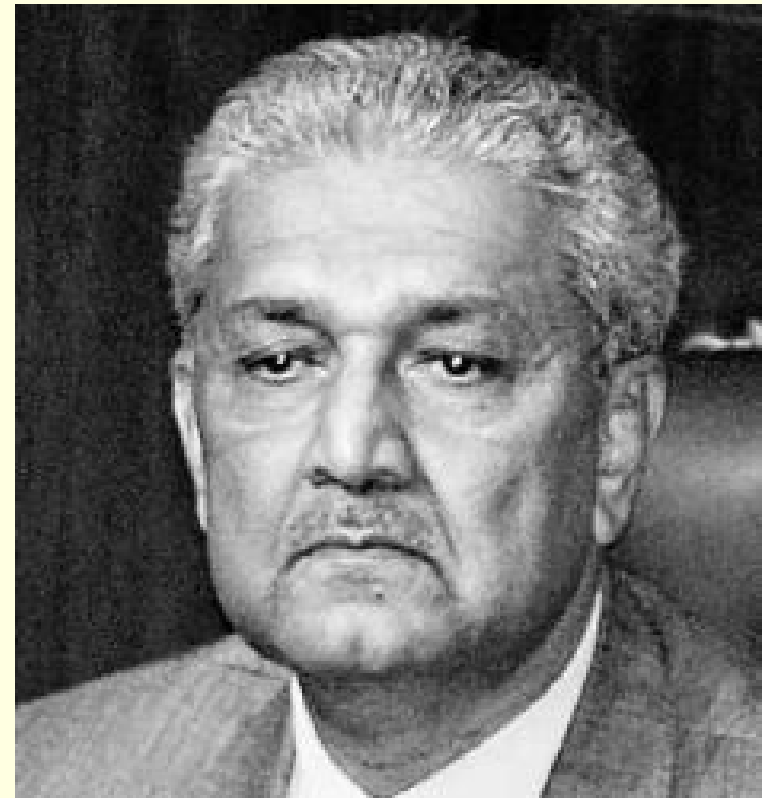
---

- パキスタン自身の核開発には、ヨーロッパ企業が関与
- 遠心分離機部品はマレーシアで製造
- 仲介者：スリランカ生まれのブハイ・サイード・アブ・タヒール
- 拠点：クアラルンプール、ドゥバイ

# 2004年～

---

- 2006年8月：前立腺癌の手術
- 同年10月以降、容態悪化
- 海外の娘が関連情報保持



Hindu, 2005年8月25日より



# 北朝鮮関連のパキスタンの主張

- **ムシャラフ大統領:**
  - カーンが個人で行ったもので、軍や政府は全く関与していない
  - カーンは2ダースの遠心分離機P-1と、より性能の高いP-11、それに流量計を供与した
  - ウラン濃縮の技術のみ、カーンは核兵器製造技術はもっていない
- **パキスタン人研究者:**
  - 北朝鮮モデルの中距離ミサイル「ガウリ」の技術提供に対してはカネで決済した可能性もある

# パキスタンの核開発および 技術移転の動機

---

- 国家存亡の危機感
- 西洋への対抗意識:「イスラームの核」
- 軍の影響力、ただしブットーの時代は民生
- (インドへの対抗意識が最大の要因)
- 国力の象徴としての核兵器
- 弱者にとっての核兵器の意味(“on par”):  
通常兵器での劣勢を無効に
- 研究者の個人的野心と欲望

# 課題：不拡散体制強化に向けて

## - カーン・ネットワークからの教訓

---

- 発展途上国の核兵器保持への願望の強さ  
さらなる不拡散の可能性
- 第三世界における「核兵器信望」
- 科学者個人の世界観、野心
- 様々な「国益」の定義、国家の戦略目標の設定のあり方
- 世論の動向
- 不拡散技術の提供と社会の動向